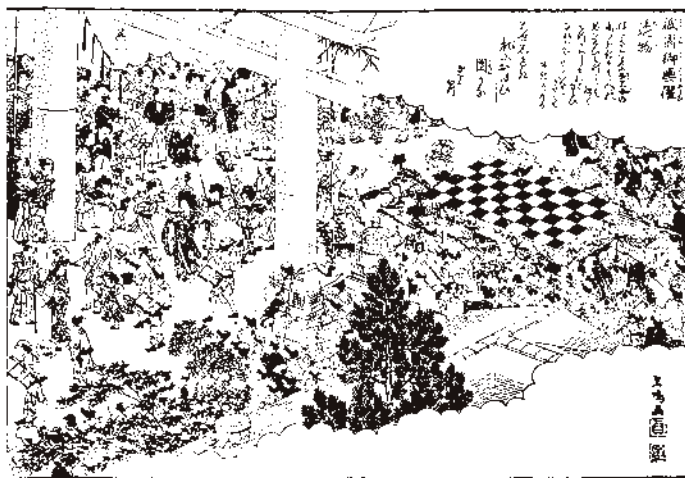


鴨東通信

春

2013.4 No.89



●日常語のなかの歴史3

お天道さま

大野 出

●てーたいむ

絵で読み解く伊勢物語 宗達伊勢物語図色紙の魅力

片桐洋一・河田昌之・泉紀子

●エッセイ

戦時期の「国技」と大相撲

胎中千鶴

見ぬ世の先達に出会うこと

玉蟲敏子

●リレー連載 世界のなかの日本研究14

「二国史」でもなく、「国際関係史」でもなく

武田知己

●台湾便り TSUJIMOTO@Taiwan-Univ.(3/4)

台湾大学のアイデンティティ

辻本雅史

―創立記念日と傳斯年学長のこと

内 容

「支配される側」の視点と「帝国史」という視点——、異なるレベルの問題に有機的関係を見いだすため、国内外の朝鮮史・台湾史研究者が多彩な問題関心を持ち寄り植民地期の地域社会像を浮かび上げらせる。国際日本文化研究センター共同研究の成果。

地域社会から見る 帝国日本と植民地

朝鮮・台湾・満洲

松田利彦・陳延媛 編

〔4月刊行〕

▼A5判・八五二頁／定価一四、四九〇円

I 研究の現状

植民地支配と地域社会

植民地から帝国史研究の可能性を再考する

松田利彦
陳 延媛

II 地域社会団体

朝鮮における帝国在郷軍人会

植民地期朝鮮における消防組について

通信政策による農村支配の一形態

植民地女性と「国民化」の問題

III 宗教・慣習と社会教化

朝鮮総督府の「社会教育」と「地方改良」

植民地朝鮮の宗教運動と「中堅人物」

咸鏡北道における思想浄化工作と郷約・自衛団

IV 慣習と法の「近代化」

植民地台湾社会における法の植民地近代性

陳 宛好

日本の植民地支配と管刑
植民地朝鮮の民間鉱業の地域動向と「鉱業警察」の設置
黄欣・台南の「固園主人」
一九一〇年代台湾社会支配像の再検討
植民地で帝国を生きぬく
南朝鮮鉄道工事と土地収用令
沖繩出身者の台北師範学校における台湾教育経験と
沖繩の「戦後」復興への取り組み

V 知識人・有力者・エリート

VI 都市と衛生・娯楽

開港期釜山における朝鮮牛の輸出と「輸出牛検査所」の設置
一九一〇年代植民地朝鮮における衛生行政と地域社会
植民地台湾の大相撲興行と「国技」相撲
日中戦争期、満洲都市の住宅問題と保健・衛生行政

VII 戦時体制下の地域社会

戦時期朝鮮における「慰安婦」動員の「流言」「造言」をめぐる
植民地期朝鮮の「国語普及運動」の展開と朝鮮女性の対応
戦時末期朝鮮巨面の機能と朝鮮人民衆との乖離について

李 鐘暎
長沢一恵

春山明哲
野口真広

陳 延媛
広瀬貞三

大浜郁子

金 貞蘭

李 炯植

胎中千鶴

田中隆一

藤永 壯

崔 眞善

樋口雄一

おてんとうさま【お天道さま】

ある程度の年齢以上の方であれば「おてんとうさま」という言葉を知らない日本人は、まずいないであろうが、実は英訳することが難しい。その大きな要因は、漢字表記した時に「お天道さま」となることにある。

「おてんとうさま」を「お天道さま」と書くことを知らない人も意外に多いのではないだろうか。

さらに「てんとう虫」を「天道虫」と表記することをご存知の方となると、それは「お天道さま」の比ではない気がする。かく言う私もかつて「てんとう虫」を「点十虫」つまり黒い点が十個ついている虫だと勝手に思い込んでいたという恥ずかしい過去がある。

しかし「お天道さま」にとっても「天道虫」についても「天道」という言葉で表記されることには深い意味がある。私は数年前、思文閣出版から『元三大師御籤本の研究——おみくじを読み解く——』（現在は品切）という小著を出版した時に、江戸時代の御籤の中で説かれている信仰対象の多くが「天

日常語の歴史 なかの歴史

3

◎日常語のなかで、歴史的語源やエピソードを取り上げ、研究者が専門的視野から紹介します。

道」であることに注目し、それが「お天道さま」すなわち太陽と認識されていたのではないかと指摘したことがある。

ただ「お天道さま」は、太陽であって太陽ではない。

こんな禅問答のようなことを言うとう理解してもらえないかもしれないが、言い方を換えれば、太陽であるけれども単に天体の太陽のみを指しているのではない、ということに、このごろ気づき始めた。

「お天道さま」を拝む時、人は確かに太陽に手を合わせる。しかし、その行為は単に太陽という物体への信仰ではなく、「天道」が我々にもたらす人間にとって優しく有難い自然界の秩序、つまり天変地異もなく異常気象もなく多くの恵みを我々に与えてくれる自然界の穏やかな秩序を祈っていたものだと思えてならない。

私の祖父も毎朝、神棚よりも仏壇よりも、まず真先に「お天道さま」に手を合わせていたという話を母から聴いたことがある。祖父が手を合わせていた先にあったものは、単なる太陽ではなく、まさに「お天道さま」だったのである。

（おののける）
大野出・愛知県立大学日本文化学部准教授

● 絵とともに鑑賞されてきた伊勢物語

——羽衣国際大学日本文化研究所 伊勢物語絵研究会編集による『宗達伊勢物語図色紙』を刊行しました。その魅力をお話しいたしますが、まず、この研究会についてお聞かせください。

泉…日本の古典文学、とりわけ王朝文学は、絵画と深く関わって生まれ、成長し、絵画とともに享受されて、日本文化の核を成してきました。そうした王朝文学と絵画との関わりは、日本文学の研究者と美術史の研究者が意見を交わしあって考えていかなければいけない問題だという思いと、海外に流出した日本物語絵画が多く、それらを調査・研究・紹介しなければならぬという思いから、平成一四年に、私の所属する羽衣国際大学日本文化研究所が、片桐洋一先生を顧問に迎え、研究プロジェクト「王朝文学と絵画に関する研究——伊勢物語絵の研究——」を立ち上げたのです。

片桐…源氏物語のなかに、伊勢物語のことが二度出てきます。このどちらにも絵がかかわる形で述べられています。伊勢物語が成立の当初から絵とともに鑑賞されていたことは明らかで、

てい—たいむ

絵で読み解く伊勢物語

——宗達伊勢物語図色紙の魅力——

片桐洋一

(大阪女子大学名誉教授)

河田昌之

(和泉市久保惣記念美術館館長)

泉 紀子

(羽衣国際大学教授)

そうでない例を探すことはできないのです。伊勢物語の場面性は、絵の世界にふさわしいものです。文字だけを読んでも、絵だけを見てもだめです。両方あわせて見ていかないといけないものなのです。

泉…研究会の第一期は、鎌倉時代から江戸の前期までを中心として、絵巻・絵本のなかに展開する伊勢物語絵の世界を読み解いていき、平成一九年に『伊勢物語絵巻絵本大成』(全二冊、角川学芸出版)として結実しました。

片桐…このときは、網羅主義です。たくさんの絵巻・絵本を総動員しました。それは基礎作業として必要なのですが、このたびの『宗達伊勢物語図色紙』の方がむしろ、絵画としての特徴も物語の特徴もはつきり出ています。じっくり読めば、伊勢物語の魅力もわかるし、絵の魅力もよくわかると思います。

● 現存五九面を原寸大で掲載

河田…私の勤める和泉市久保惣記念美術館で平成一九年に、開館二五周年記念特別展「伊勢物語——雅と恋のかたち——」を開催しました。研究会の成果も存分に頂戴しながら、皆さんに

協力していただいて、展覧会ができたのです。そのなかで俵屋宗達の伊勢物語図色紙を二〇点集めました。他の絵巻や工芸品もたくさんあるなかで、一点一点の特徴を見出し、それを充分に展観で示すことができたかという点必ずしもそうではありませんでした。そこで、集めきれなかったものを全部集めて、宗達色紙の研究をしようということになりました。作品をじっくり見ながら研究するという姿勢ができていましたから、この本にもそれが結実して、なおさらいいものになったような気がします。

当初、所蔵先がわからないものかなりあり、大変苦労しましたが、いろいろ手がかりをたぐり寄せながら、五九枚あるうちの五五枚の所蔵先がわかり、現物を調査させていただくことができました。今回、それらを原寸大のカラーで掲載できたというのは、のちの研究のために、大変意義があると思います。

——最初は、本の判型を小さくするために、縮小しての掲載を提案しましたが、先生方はどうしても原寸大で掲載だと（笑）

河田…展覧会図録だと、出品したものを記録的に掲載することが重要なのです。ですから、図版の大きさもばらばらで、とにかく小さくても全部載せる、となってしまいます。そういうものを見ますと、やはり迫力がなく、詳細な分析ができないですね。原寸大で、われわれが感じているものを他の方々にも感じていただきたいというのがありました。

泉…それは最初から動かなかったですね。私たちとしては。

●大胆でシニールな構図

河田…宗達の人物像ははっきりわかっておらず、史料も少ないのです。この色紙は、宗達の工房の作品なのですが、宗達が導き出した技法というのが、工房の人たちに伝わっているということがよくわかりましたし、できのいいものは、かなり宗達自身の目の届くところで作られたのだろうと実感することが多かったですね。慶長七年（一六〇二）に平家納経の修理をした段階で金銀の装飾の技法を獲得していた宗達が、物語をどういう風にとらえ、伊勢の特徴となるところをどういうふうに表示しているかということに、独自の見解もよく見えますし、これまでにない伊勢物語の世界が展開しているというのをあらためて感じました。

泉…そうですね。たとえば、益田家本の第九段「宇津の山」は、次第に遠ざかっていく修行者を男が見送るという構図で描かれているのですが、これは伊勢物語本文にはない場面と時間なのです。そのあとに、琳派とくに深江蘆舟などは、修行者が山陰に姿を消していく、あるいは笈子おごだけしか見えないというように、時間をずらして描くのですが、その出発点がこの宗達色紙です。時間と空間のとらえ方が、非常に面白い。

男女の心理の大胆な構図とシニールな表現も興味深いです。片桐先生も序章で書いておられますが、男と女の行き合わない心を、対角線の端と端に男女を付置し、その間に海も描くという。

河田…男女の気持ちの遠さ近さを、描かれた人物の距離によって

表すというのは、古い絵巻のスタイルで、久保惣本の伊勢物語絵巻にも出てくるのです。そういうものをベースに置きながら、その間に土坡や波や霞などを入れ込んで、非現実的な空間をそこに創りだしているのですね。そういう感覚が非常に新しいと思います。

泉…それと、たとえば益田家本第七十五段「世に逢ふこと難き女」なら、拒絶した女の和歌が、一字一字ぼつんぼつんと切り離されるように書かれています。その歌の一字一字を拾っていくと、男のところにとどりつくというような、登場人物の関係や心理を、大胆でシユールな構図で〈見える化〉しているのですね。

河田…そのあたりの感覚でいうと、益田家本第四十五段「ゆく螢」の文字配りも、螢の炎が揺れているような印象を与えるような書風ですね。

泉…本文のどこを選んで詞書として書いているかということも、非常に面白い問題です。新出本第九段「隅田川」は、東に下る男が「なにしおはば いざこととはむ みやこどり」という和歌を詠む有名な場面です。「舟こぞりて泣きにけり」で終わるのですが、その「なきにけり」だけを色紙の右端に書いてあります。画面の半分以上が金銀の野毛が散らされた金地、その手前には群青の隅田川。そのはざかに舟が浮かんでいて、詞書としては、「なきにけり」だけ。この演出がすごいです。

河田…益田家本第六段「雷神」では、風神雷神図につながるような雷さんを描いて、その目線の下の方に、「神さへいといみじう

なり」という、その一文だけを書いています。その感覚は、隅田川の選択につながるところがありますね。

泉…新出本は第九段だけでなく、十四段「くたかけ」でも同様な表現があって、夜明け前に帰った男をうらんだ女が詠んだ歌の第五句「せなをやりつる」だけが、詞書に書かれています。新出本の絵の表現はなかなか繊細で、見なおしたのですが、こういう詞書の選び方の面白さという点でも、センスがあるなと思いました。

●描かずに解釈の余地を残す

片桐…詞書というのは、普通は絵の説明で書いているはずなのです。ところが、これはぜんぜん違うわけです。逆に、益田家本第八段は詞書には「しなの（信濃）なるあさま（浅間）のたけ（嶽）に立けぶり」とありますが、絵にはけぶりを描いていないのです。心のなかのけぶりということです。

河田…見えるものを、描かずに思わせる、解釈させるということを、宗達色紙はよくやっています。もやとした金の空間を、いろんな形で読み取れるような空間につくっているのです。それが物語を読み込む人にとってはいくらかでも解釈できることにつながります。

片桐…鑑賞者の心のなかや、登場人物の心を、絵画しているのではないかと思いますね。

河田…偶然ではなく、意識して、宗達はこのもやとした金のむらをつくっているのです。土佐派はもつと緻密に金を撒き分け

て、微塵^{みじん}という非常に細かい金を使ったり、ちょっと大きめの砂^{すな}子^こを使ったり、非常に大きな金箔^{きんぱく}を使ったりと、形がわかる金を使うのです。そういうことを全部分かった上で、宗達は他の人がやらないような技法を使うことによって、新たな空間をつくっていきました。それは町絵師としてのあり方で、他のグルーブの仕事に抵触しないということを頭にいれながら、新たな技法を作ったのではないかと思います。当時の町絵師の生き方が表れているようにも思います。

●何通りもの読み方

片桐…今回の本では、個々の主張については、あえて整合性を求めないで、それぞれで主張していただくという方針ですから、読みなおして行くと、疑念を感じるところもあるのですが（笑）、ひとつのことは見ても、いく通りもの考えがでけるのです。自分自身が一度考えたものをまた否定することもあるかもしれないし、他の人が書いたものをこれどころかな、と思うこともあるでしょう。そういうふうに読者が、自分でいろいろ考えられて、本書に書いてあることを否定できるような、そういう読み方をしたら非常に面白いと思います。ここに書いてある通りの読み方しかできないというのは、この本の面白みがわかりません。



左から河田氏・泉氏・片桐氏

泉…宗達色紙にはまだまだ謎があります。詞書のあるものとなないものがあるのはなぜなのかとか。

河田…図様についても、室内を描いているのに、どうして樹の枝がこんなところにあるのか（益田家本第五十六段「臥して思ひ起きて思ひ」）というような謎があります。

片桐…やはり学問というのは、なぜと考えるのが根本です。そう考えると、時空を超越した世界が宗達色紙にはあるとしか考えられませんね。

泉…執筆者は、まだまだ書き足りないことがいっぱいあったと思うのです。限られた時間で、五九の作品を取り上げていかなければいけませんでしたし、原稿の修正も何回もありました。決してここに書かれている内容で完璧だとは皆思っていない。片桐先生がおっしゃったように、いろんな読み方ができますので、ぜひ何回も読んで、さらに自分の読みを試みていただければと思います。

河田…書風の問題や、制作者の問題、関わった人たちの問題など、まだまだ解決されていない部分がたくさんあります。そういう意味では、伊勢物語・王朝文学研究も、宗達・琳派研究も、この本ができたおかげで、今以上の研究がなされることが目に見えていると思います。そのためのデータが全部入っていますから、充分活用していただきたいと思っています。

戦時期の「国技」と大相撲

相撲の歴史を調べています、というところ「ああ、いいですねえ。私も若貴ブームのときは夢中で観てたなあ」と、遠い目をする人が多い。でも最近では外国人ばかりでちよつとね、などと寂しがる向きもある。

実は私はその逆で、朝青龍が一人横綱として君臨した時期に、初めて大相撲に魅せられた。二〇〇五年ころからだろうか、モンゴル、ロシア、ブルガリア、韓国など、ユーラシアのいたるところから、続々と「ちからびと」たちが大相撲界に集まってきた。顔つきや肌の色の異なる力士たちが技を競うさまが、私にはとても新鮮だったのだ。

しかし、朝青龍ら外国人力士の素行を問題視し、「国技」の危機として警戒する論調が高まったのもこのころである。メディアがさかんに力士の品格とやらを強調することに、どこか排他的なナショナリズムの気配を感じ、違和感を覚えずにはいられなかった。そもそも日本社会が相撲を国技として認識するようになったのは近代以降のことで、「国技としての相撲」に長い歴史があるわけではない。ことさらに「神事」や「伝統」の側面ばかりを強

胎中千鶴

調し、外国人力士を区別するような風潮を生むこの社会には、未だ帝国日本の残滓ざんしのようなものが見え隠れする。

私の専門は日本統治期の台湾社会史なので、そんなふうに国技について考えているうちに、植民地の台湾・朝鮮や満洲国などの、いわゆる「外地」で、支配者の国技である相撲が「ナショナルな身体」として異民族に対しどのように表現されたのか、という点に関心が向くようになった。近現代の相撲史と外地との関わりを調べてみようと思いつてから、もう五年ほどになる。

明治維新後の近代化政策のもと、前近代的で「野蛮な技」として排撃された大相撲は、日清・日露戦争の勝利で高揚したナショナリズムに乗り、かろうじて息を吹き返した。しかし大正期になると、関東大震災や不況の影響で興行収益は再びガタ落ち、危機感を抱いた関係者は、政界や皇室に人脈をもつ杉山茂丸や頭山満らの手を借りて、興行組織の財団法人化を文部省に申請した。その結果、一九二五年に財団法人大日本相撲協会が成立し、大相撲はジリ貧の興行団体から、天皇賜杯をかけて争う伝統的競技、すなわち国技を担う啓蒙団体へと、華麗なる変身を遂げた。半永久

的な国家的保護を約束された、最強の興行組織の誕生である。

しかしその代償として、一九三〇年代の戦時期になると、大相撲はナシヨナリスティックな精神性をもつ「国技相撲」のお手本を、土俵上で示さざるを得なくなつた。本場所や巡業において、力士は武士道に通じる厳肅な真剣勝負を求められた。朝鮮場所や満洲場所など、異民族の視線を意識する場面ではなおさらのことで、支配者の名に恥じない敢闘精神が必要とされた。

おそらくそうした要請にもつとも誠実に答えたのは、六九連勝の偉業を成し遂げた横綱双葉山であろう。双葉山の快進撃は、中国戦線を拡大する日本軍に重ねてイメージされ、所作の美しさやストイックな態度、潔い闘いぶりは、まさに「相撲道」を体現するものとして賞賛を浴びた。

とはいえ、当時の資料を追ってみると、戦時期の力士たちがみな「国技」をきちんと披露できたかどうか、はなはだ疑わしいことがわかる。なんといっても大相撲の出自は江戸期から続く興行団体である。本場所ではそこそこ本気をだすものの、巡業ともなると、力を抜いた花相撲に終始する者も多かった。タニマチの旦那衆と持ちつ持たれつ、その日暮らしに明け暮れるのが力士稼業だ。武士道精神を持つというほうが酷であろう。

こうした大相撲に対し、識者からの風当たりは強かった。相撲を武道ととらえ、戦時国策に沿う相撲精神の普及を唱えた衆議院議員の藤生安太郎^{ふじおやすたろう}は、「熱狂的人気ニ馴レテ、興味本位ノ見世物ニ墮シ、力士ニ「士」タルノ風格ナキニ至ラントス」と痛烈に批

判した。元力士で、のちに協会を脱退し満洲に渡った和久田三郎は、大相撲には「今までの相撲につきまとうすべての因習と腐敗がこもっている」と述べている。

また、和久田を頼って満洲に渡ったアマチュアの相撲教師、八尾秀雄は、大相撲のアンチテーゼとして、近代的な体育理論と国粹主義的な精神性を結合し、青少年向けに独自の相撲教育メソッドを作成した。和久田や八尾のように、原理的な相撲をめざす日本人が、協会と一線を画し異民族の住む外地で活動したことは、偶然ではないだろう。眼前の被支配者を意識してこそ、支配者が望む「純正なる国技」は成立する可能性があった（八尾秀雄に関しては、松田利彦・陳延浚編『地域社会から見る帝国日本と植民地——朝鮮・台湾・満洲』所収の拙稿で言及した）。

かくして戦時期においても「国技」を上手に演じられなかった大相撲だが、それでも会場には常に大観衆が押し寄せた。裸の男が四つに組むという、プリミティブでシンプルな競技は、人種や民族を越えて人々に愛された。声援が飛び交う会場では、まるで一種の祝祭のように、観客の熱狂が土俵上の力士と共振する。小兵力士が巨体を制したり、土俵際で逆転勝利を収めたりすれば、観衆もまた、息苦しい時代の閉塞感から、一瞬だが解放された。このあまりに豊かな娯楽性をもつ大相撲を「国技」の枠に閉じ込めておくことは、帝国日本をしてもなし得なかったのである。現在の大相撲に「国技」というラベルを貼りつけてもしっくりこないのは、無理からぬことだろう。

（目白大学教授）

見ぬ世の先達に出会うこと

今から三十年以上も前、まだ日本美術の基本図書を学んでいた学部生の頃に藤岡作太郎著『近世絵画史』と出会った。日本美術史の授業で流派の展開と時代の趨勢とが経糸と緯糸のように巧みに織り成された名著だと勧められたからだ。『旧風革新』『諸派角逐』など絶妙な四字熟語に魅了されながら読むうちに、あつという間に近世、つまり約二四〇年におよぶ江戸時代の絵画の流れが立体的に頭に入ってきた。そして読後、この藤岡作太郎（一八七〇～一九一〇）という人は、国文学者でありながらどうやってこれだけの画家に関する知識を蓄え、情報を集めることができたのだろうか——大体にして藤岡の書斎はどれだけの書物を揃えたライブラリーだったのだろうか、当時の自分の貧困な書棚を見まわしつつ、つくづくと考え込んでしまったのだった。

この春に代表世話人を務める古画備考研究会編『原本『古画備考』のネットワーク』を上梓した。十年にもおよぶ共同研究「江戸時代における〈書画情報〉の総合的研究——『古画備考』を中心に——」の成果の一つだが、ある意味でそんな積年の問いかけが解決したように思っている。

玉たま蟲むし敏さと子こ

藤岡作太郎が江戸の絵画の展開を学ぶ上で、参考にした人物や文献は膨大だ。そのなかで岡倉天心の日本美術史の講義録から、『古画備考』の存在を知ったらしい。『古画備考』は、權威ある江戸幕府の奥絵師四家の木挽町狩野家に出自した朝岡興禎（一八〇〇～五六）が、最晩年の嘉永三年～四年（一八五〇～五）にかけて編纂した四八巻五三冊から成る日本の絵画に関する大著である。カヴァーする時代は幅広く、収録画家はトップの聖徳太子から朝岡の同時代人にまでおよぶ。だが、日本美術史の基本図書とはいえ、現代の眼からすれば情報や記述の不十分さは免れず、美術史研究室の書棚の片隅に埃をかぶって収まっているといったところが相場だろう。明治中期のまだ『古画備考』に熱い眼差しが注がれた時代、藤岡はこの書物の写本を所蔵し、自ら書写もするくらいに入れ込んだ。明治の藤岡の前方には朝岡興禎という江戸の大先達がいたのだった。

朝岡興禎は、父の伊川院栄信も兄の晴川院養信も木挽町狩野家の当主という名門に生れ、若年から和漢の名画に親しみ、絵画技術の習得のみならず鑑定方法も学んだ。当時の木挽町狩野家に

は、父と同世代の檜山坦齋（ひやまだんさい、一七七〇～一八四二）という町人階級の優れた文獻研究家・鑑定家が出入りしていて、朝岡は助言を受けていたらしい。その交流は、旗本朝岡家を継いでからも檜山の没年まで途切れず、檜山の幅広い交友関係を通じて、朝岡は実際に参加しなくとも市中で展開される古画研究の最新の動向を知ることができた。つまり、朝岡の網羅性の背景には、將軍家や諸藩の大名家に仕える武士、市中で活躍する町人たちによって張り巡らされた情報のネットワークが存在したのである。

さて、先輩や同輩、若い人々を巻き込んで共同研究を立ち上げるほど『古画備考』に心惹かれたことには、もう一つ大事な理由がある。私たちが現在一般に目にする『古画備考』四冊は、思文閣出版によって昭和四五年に出版された明治四四年刊の活字本第二版の復刻である。ところがこの活字本は原本ではなく、東京国立博物館所蔵の「図書寮印」が捺された写本の一つに増補訂正を加えて出版されたものだった。だから、活字本をいくら眺めても原本の本当の姿はなかなか見えてこない。東京藝術大学付属図書館が所蔵する朝岡興禎自筆の原本『古画備考』は二冊が亡失して五一冊しか残っていないが、朝岡が手ずから描いた絵画の縮図や朱で写された印章などの紙片がべたべたと貼付されたスクラップ・ブック状態で、まるでかつて勉強熱心だった頃の日本の中・高校生の勉強ノートを見るような初々しさなのだ。要するに、ぎっしりと詰まった情報量と手書きの文字面から伝わる朝岡の真摯な情熱に圧倒されてしまったというのが本音だった。

そして、そのこまめなノート作りは近代以降、造形芸術や文化財の調査研究に携わる学芸員の基本となったように思われる。現在進行形で美術史を学んでいる大学院生や、日夜調査にいそんでいる美術館・博物館の学芸員にとっても、作品を前にしてその有様をメモし、寸法を測り、賛文や印章・署名を写し、スケッチや写真撮影をし、机に戻ってからパソコン上の調書に書き込んで整理するという作業は、すべての始まりではないだろうか。

『原本「古画備考」のネットワーク』では、朝岡を継承する近現代の人々として、先の藤岡の外にアーネスト・フェノロサ、岡倉天心ら日本の美術史学の泰斗、増補訂正に関わった明治中・後期の東京帝室博物館員の片野四郎や太田謹（つづみ）、戦前戦後の文化財行政の中枢にいた田中一松（いちまつ）までを取り上げている。田中には「昭和の『古画備考』」と呼ばれる有名な調査ノートがあるし、それ以降の調査方法の展開は、田邊三郎助氏や有賀祥隆氏らが寄稿する『講座日本美術史Ⅰ 物から言葉へ』（佐藤康宏編、東京大学出版会）で詳論されているので、そちらをご参照されたい。

このように、現在の日本で行われている造形芸術や文化財へのアプローチ法は一夜にして成し遂げられたのではなく、江戸後期の実証的な調査研究法に始まり、近代の百年を経た伝統の厚みの上に成立している。『古画備考』を起点としながら、日本の名画や宝物を継承してきた見ぬ世の先達の底力に触れてみることは、東日本大震災後を生きる私たちにとってかなり大切なことのように感じている。

（武蔵野美術大学教授）

「一国史」でもなく、「国際関係史」でもなく——武田知己

今回、「世界のなかの日本研究」というテーマに接した筆者には、まず次のような問いが浮かんできた。

それは「日本研究の本場はどこか」という問いである。筆者の答えは「日本」である。当たり前かもしれないが、筆者は日本の政治外交史研究を進めるなかで、史料発掘やオーラルヒストリーを比較的積極的に行ってきたためか、その近現代史をめぐってどれだけの事柄が未解明のまま残されているかを痛感している。この「日本というフィールド」で、もつともつと資史料を開拓し、確かな実証研究を進めなければならない。それが筆者の信念である。

にもかかわらず、近現代日本の政治外交史研究が「世界」を意識しないで進められるとも思わない。この場合の「世界」とは、とりあえず、日本がおかれていた「国際環境」を意味するといえよう。しかし、それは「異なる文明」のこともある。たとえば、近代日本は紆余曲折をはらみながらも近代化を進め、近代国際法と西欧型の近代国家秩序に基づく条約体制を東アジアに導入した。その最大のきっかけは西力東漸といわれる一九世紀半ばか

らの対外危機であった。近代日本の出発のころの日本を研究するには、国際的な視野が求められるだろう。

しかし、誤解のないようにいえば、グローバル化の進展するなか、「一国史」は時代遅れであり、「国際関係史」こそが今後の歴史研究の動向であるべきだといいたいのではない。筆者がいたいのは、近現代の日本政治の歴史には、「世界」への視点が内在的に組み込まれているということである。

そういう筆者自身、コングロマリットではないし、それまでそうした観点からの研究を展開してきたわけでもない。しかし、二〇〇九年に在外研究で一年間ロンドンに行くことになったとき、筆者は「一国史」的な教育と研究手法にそれなりに習熟した自分が、どのようにしてそうした視点からの研究を進め得るのか、自分なりの解答を得たいと思っていた。

在外研究時に感銘を受けたことの一つは、彼の地で出会ったイギリス近代史研究者たちの付まいであった。彼らには、やはり「太陽の沈まぬ帝国」の強い伝統とそれへの愛情が流れているように感じた。もちろん、彼らも平気で自国の過去を批判するが、その

際にも、彼らはその過去を自らの一部と考え、無責任な批判は行わない。しかも、そうした多くの研究者が複数の言葉（ラテン語やギリシヤ語も含め）を操れる。

彼らの国籍も比較的多様であったように思うが、彼らの学生の国籍もそうであった。こうした環境では、イギリスの近代史は純粹な「一国史」としては成り立ち得ないだろうと思ったが、しばらくして、「一国史」を貫徹しようとしても、結局は「帝国としてのイギリス」が、そもそもある種のグローバルズムを内包していることに思い到った。近年日本の近代史を再検討する上で重要な視点となっている「帝国」がはらむ「グローバルズム」という視点の本場は、やはりイギリスなのだろうと感じた。

もちろん、ロンドン時代、筆者が日本研究者と交流しなかったわけではないが、他方で、イギリスでもアメリカでも日本研究の人氣がこれほど衰えていたのかと実感することも多かった。筆者がなれ親しんできた細かな実証を大切にする日本政治外交史研究は、もはや世界から求められていないのではないかという不安にも駆られた。実際、日本人の歴史実証主義の研究者が「空気」のように感じている綿密な実証研究は、そうしたことに関心を持たない彼らとの会話では無用の長物でしかなかった。それを、彼らの「共通言語」で翻訳し直さなにかぎり、双方向的なコミュニケーションが成立しないことには、衝撃すら受けたものである。

ここで、改めて「日本のなかの世界」に思いを巡らしてみたい。筆者が目指しているような「国際関係史」でも「一国史」でも

ない視点、すなわち、帝国であった日本についての「一国史」研究者としての知見を応用しつつ、日本のなかに「世界」を認め、同時に「世界」の研究者が理解し、共感できる視点は、可能性としてありうるのだろうか。それは帝国史となるのか、あるいはそれを発展させたグローバルヒストリーとなるのか。あるいは、国際関係史こそがやはりあるべき形かもしれないし、場合によっては単なる一国史にしか見えないものとなるのだろうか。

帰国後、改めて日本政治外交史の先達の業績を振り返ってみて、愕然としたことがある。先人達のなかには、「世界」を内包していた日本を無意識にでも自らの研究課題としていた者が少なくないのである。それゆえに、彼らの幾人かは国際的にも認められた学者となった。

我々の世代ももつと積極的に英語で自らの業績を発信しなければならぬ。灯台もと暗しというが、世界をみるまでもなく、日本研究の本場である日本の学界にも燦然と輝く業績がある。筆者は、すでに不惑の年を数年過ぎたが、こうした業績を前に、自分は一体何を学んできたのかと気持ちにはグラグラ揺れ動き、彼らが切り開いた研究の地平を広げることの困難さに、半ば呆然としてしまう。それでも精進するしかないのだから、最近はずらに課した「挑戦」を楽しみたいと思っているところである。

（大東文化大学法学部教授）

③ 台湾大学のアイデンティティ

——創立記念日と傅斯年学長のこと——

辻もとまさし
本雅史

創立記念日

昨年（二〇二二年）一月一日、国立台湾大学は八四回目の創立記念日を祝った（授業は休講）。それは、日本植民地政府創設になる「台北帝国大学」を台湾大学の開学と認識していることを意味している。台北帝大は一九二八年に文政学部、理農学部の二学部をもって発足した。この帝大は、今の韓国ソウル市に作られた「京城帝国大学」（一九二四年予科、二六年法文学部と医学部）に次ぐ七番目設置の帝国大学であった。ちなみに大阪帝大（一九三一年）や名古屋帝大（一九三九年）より早い。ただ本土の帝大が文部省所管であったのに対し、植民地の両帝大は総督府の管轄下にあり、しかも入学生は常に日本人が多数を占めていた。教官のほぼすべてが日本人であったこととともに、忘れてはならない事実である。

なお韓国ソウル大学の創立は一九四六年。京城帝大はその

前身校とは認識されていない。昨年八月ソウル大学訪問の際、この点を関係者にうかがってみた。ソウル大学は他の九つの専門学校と統合して発足しており、京城帝大とは別の大学として一九四六年に創設された、というのがお答えであった。これも重要な「歴史認識」と改めて自覚できた。

建築群——植民地の「痕跡」

今の台湾大学のメインキャンパスは、かつての帝大をそのまま引き継ぎ、学舎も旧帝大時代の建築物を可能な限り使っている。現に私の所属の日本語文学系は、創設時の総合図書館（一九二九年竣工）の一角にある。その二階の大学歴史展示室にちなんで、この旧総合図書館は今「校史館」と称されている。

校史館は、旧建築物の多い台湾大のなかでも最初のもので、ひととき典雅な品格をたたえ、観光客が絶えることがない。私の研究室はこの校史館二階の東端にある。すぐ東隣の文学

院（文学部）本館も開校時の建築で、校史館を一回り大きくした堂々たる威風をそなえている。いずれも今は台北市指定の「古跡」となっている。三〇年余り歴史が古い京都大学にも、このような堂々たる風格のある建物ほもはや見られない。

校史館の写真を見た畏友の若尾政希氏（一橋大学）が、一橋大学東本館と酷似していることに気づき、「ご教示いただきたい。すなわち一橋大の東本館は一九二九年完成、設計は東京帝大教授伊東忠太（1867-1954）。同年に建てられた台湾帝大建築群の設計者は井手薫（1859-1914）で、彼は日本統治下台湾で活躍した建築家。実はこの伊東と井手は、辰野金吾、東京帝大工科大学教授、東京駅設計者）に師事した東京帝大の同門であった。改めて調べてみれば、井手は台北高等学校講堂（現・台湾師範大学礼堂）や総督府高等法院（現・司法大厦）など、植民地時代台湾で官庁や学校の設計を多く手掛けていることが分かった。これらはいずれも目に見えて残る植民地の「痕跡」にはかならない。

痕跡といえば、台北帝大は一九四五年三月二九日に連合軍に爆撃された。その時の傷跡が、校史館正面玄関の柱に、今も生々しく残っている。私は、こうした建築物の中に日々身を置いているわけである。しかもほぼ日本語だけの世界。時に居心地の悪い妙な気分におそわれることがないとはいえない。ちなみにソウル大学は、一九七五年以降キャンパスをソ

ウル市郊外に全面移転した。キャンパス内に「帝大」の痕跡はたぶん見られないだろう。

「校門事件」——学生の心意気？

「台北帝国大学」は一九四五年一月一日、国民政府派遣の羅宗洛（学長）に引き渡され、「国立台湾大学」として新たな歴史が始まった。この日が現在の創立記念日である。

ここでエピソードひとつ。昨年の創立記念日、私は大学正門（これも市指定古跡）に、金文字で浮き彫りにされた大学名が「臺北帝國大學」であることに気づき、わが目を疑った。「あり得ない」と思いつつ、スマホで証拠写真を撮った。同僚にその「証拠写真」を見せたが「様に吃驚。しかしもっと驚いたことに、翌日正門は「國立臺灣大學」に変じているではないか。私はわけがわからなかった。

その後判明した事実によれば、学生の悪戯だという。精巧にプリントした厚紙を貼ったものらしい。肉眼でも、写真を拡大しても、私には紙貼りだとはついに分からなかった。この背景には、学生たちの要求に冷淡に対応する大学への反発があるという。まるで植民地下の帝国大学と変わらない、という当局に対する当てつけとみられる。そういえばその前日だったか、百人を超えるデモ隊がシュプレヒコールとともに、椰林大道を行進していた。彼らにしてやられた私は、台



大の学生さんたちもなかなかやるもんだね、とその心意気に妙に感心した。この「校門事件」はテレビのニュースで報道されたらしい。

大学のシンボル——傅斯年学長

現在の台湾大学発展の礎石を築いたのは傅斯年校長(学長)である。傅斯年(1896-1950)は、一九一九年北京で始まった五四運動で活躍した北京大学の学生リーダーで、胡適や蔡元培の強い影響をうけている。それまで北京大にいた彼が、請われて台湾大学校長に就任したのは一九四九年一月。二・二八事件(一九四七年)の余燼も冷めやらぬ強圧的な軍政の中で、当局に抗して、大学・学問の自由と学生の生命を守り抜いた。



上から、校史館・正門・傅鐘

いわば伝説的な校長である。就任二年に満たない一九五〇年一二月、激務がたたったか、脳出血のため急逝した。

傅校長は台湾大学人の心に今も強く生きています。彼にまつわるモニュメント類が少なくない。たとえば校史館陳列室正面では彼の銅像が、訪れたすべての人を迎えている。ここに掲額された校訓「敦品勵學愛國愛人」は、一九四九年の創立記念日に学生に与えた訓話に由来する。大学本部正面には、傅校長をしのぶ「傅鐘」が据えられ、日々時を告げている。

この鐘が毎度二一回鳴るのは、一日の持ち時間は二時間、残りの三時間は思索せよという傅校長の意による。台大の校章は、中心部の傅鐘と大王椰子を、大学名と校訓が囲むデザイン。傅校長のシンボリックな図案化とみられる。

大学正門脇に熱帯樹木が茂る「傳園」がある。傅校長はその中心部に埋葬されている。傅斯年という人物は、「国立台湾大学」の歴史を一身に象徴し、いわば本校のアイデンティティを体現している。時を超えてかくも愛される学長を擁する大学は、思えば幸せではないか。その裏に、乗り越えねばならなかった幾多の苦難があったにしても、やはり羨ましいとの念を、私は禁じえない。(国立台湾大学日本語文学系教授)

書評・紹介一覧 12～2月掲載分		※(評)…書評 (紹)…紹介 (記)…記事〔敬称略〕
北垣国道日記「塵海」	(記)『園芸世界』第424号(平野恵)	
(評)『古文書研究』第74号(友田昌宏)	京都の歴史災害	
仁明朝史の研究	(紹) MK 新聞 12/1	
(評)『日本歴史』第775号(有富純也)	京都 伝統工芸の近代	
戦国大名武田氏の権力構造	(紹)『月刊美術』第447号	
(評)『古文書研究』第74号(遠藤英弥)	(紹)『Leaf』2月号	
古井喜実と中国	(紹)『月刊京都』2月号	
(紹)『史学雑誌』第121編第12号(笠井秀樹)	(紹) MK 新聞 2/1	
東国における武士勢力の成立と展開	(紹) 新美術新聞 2/11	
(評)『日本歴史』第777号(田中大喜)	憲政常道と政党政治	
近代数寄者のネットワーク	(記)「朝日新聞」(朝刊) 12/23(鈴木京一)	
(評)『日本歴史』第775号(市村祐子)	岩倉具視関係史料	
松岡愼庵本草学の研究	(記) 京都新聞(朝刊) 2/3	
(評)『日本医史学雑誌』第58巻第4号(岩間眞知子)		

12月から3月にかけて刊行した図書

図 書 名	著 者 名	ISBN978-4-7842	定価	発行月
戦国大名佐々木六角氏の基礎研究	村井祐樹著	1663-5 C3021	12,180	12
岩倉具視関係史料〔全2巻〕	佐々木克・藤井譲治・三澤純・谷川穰編	1659-8 C3021	25,200	1
摂関院政期思想史研究	森新之介著	1665-9 C3021	6,825	1
中世の契約社会と文書	村石正行著	1668-0 C3021	7,875	2
室町幕府管領施行システムの研究	亀田俊和著	1675-8 C3021	10,290	2
原本『古画備考』のネットワーク	古画備考研究会編	1674-1 C3070	9,660	3
神仏習合の歴史と儀礼空間	嵯峨井建著	1671-0 C3021	9,030	3
京舞井上流の誕生	岡田万里子著	1672-7 C3073	9,450	3
日本の食の近未来	熊倉功夫編	1678-9 C1039	2,415	3
医療の社会史 生・老・病・死	京都橘大学女性歴史文化研究所編	1677-2 C1021	2,940	3
宗達伊勢物語図色紙	羽衣国際大学日本文化研究所 伊勢物語絵研究会編	1679-6 C3070	19,950	3
日本中世の社会と寺社	細川涼一著	1670-3 C3021	8,085	3
高木仙右衛門に関する研究 「覚書」の分析を中心にして	高木慶子著	1684-0 C3021	2,100	3

12月から3月にかけて刊行した継続図書

シ リーズ 名	配本 回数	巻数	巻タイトル	ISBN978-4-7842	定価	発行月
住友史料叢書	27	27	銅座方要用控 三	1664-2 C3321	9,975	12
新島襄を語る		別巻2	八重さん、お乗りになりますか	1669-7 C1016	1,995	12
佛教大学国際学術研究叢書	3	3	植民地朝鮮の日常を問う	1660-4 C1021	2,940	1
京都大学史料叢書		14	吉田清成関係文書5 書類篇 1	1666-6 C3321	20,475	2
佛教大学研究叢書		18	早池峰岳神楽の継承と伝播	1676-5 C3039	4,830	2
顕宗院本	2	2	茶道望月集	1667-3 C3076	16,800	3
佛教大学四条センター叢書		5	老舗に学ぶ京の衣食住	1673-4 C1039	1,995	3

(表示価格は税5%込)

営業部より

▼東京駅八重洲口正面に「京都館」という京都市のアンテナショップがあります。京都の特産・工芸品の販売はもちろん、催事・観光など、さまざまな情報も発信しております。

その「京都館」にて『老舗に学ぶ京の衣食住』(本誌17頁掲載)も販売しておりますので、京都旅行の前にはぜひ「京都館」へおこしやす。

もちろん『老舗に学ぶ京の衣食住』は全国の書店で取り扱っております。(江)

☆学会出店情報

小社刊行図書を展示販売
※出店日は変更の可能性有

建築史学会(金沢工業大学) 4/20(土)
日本医史学会(日本歯科大学)

5/11(土) 12(日)
美術史学会(関西大学千里山キャンパス)

5/10(金) 12(日)
歴史学研究会(一橋大学)

5/25(土) 26(日)
茶の湯文化学会(石川県教育会館)

6/8(土) 9(日)
神社史料研究会(箱根神社)

8/18(日) 19(月)

編集後記

▼伊勢物語の世界に初めて魅了されたのは二十歳のとき、NHK「まんがで読む古典」でした。今調べてみると、脚本中沢新一、キャラクターデザイン松苗あけみと、四半世紀前の「あのころ」が甦ってくるなあ。これもまた「絵で読む伊勢物語」には違いない。(h)

▼「一九三〇年代東アジアの文化交流」は戦争へと向かう暗い時代に文化交流の軌跡を見出そうとする意欲的な論文集です。注目すべきはほとんどが国外の執筆者である点。本書は多くの問題を抱える現代東アジアの文化交流の結晶でもあります。(M)

▼今年の桜は早かった。例年花見でにぎわう円山公園も一足飛びの満開に出店が追いつかず、店影まばらでちよっと拍子抜け。出店の方々は商機を逃してさぞ悔しかろうと思うにつけ、刊期を延ばして商機を逃しがちな自分を省み、改心の花見となった次第です。(大)

▼突然引越して決意して、改めて未読の本が多いことを再確認。既読のものでも処分するかどうかに悩みました。本によっては久しぶりに姿をみたものもあり、当時のことを思い出し、しばしば懐かしくなりました。(一)

▼表紙図版…祇園祭のねりもの(『都林泉名勝図会』巻2)／『京舞井上流の誕生』より

定期購読のご案内

『鴨東通信』は年4回(4・6・9・12月)刊行しております。

代金・送料無料で刊行のつどお送りいたしますので、小社宛お申し込みください。バックナンバーも在庫のあるものについては、お送りいたします。詳細はホームページをご覧ください。

おうとうつうしん

鴨東通信 四季報 No.89

2013(平成25)年4月25日発行

発行 株式会社 思文閣出版

〒605-0089

京都市東山区元町355

tel 075-751-1781

fax 075-752-0723

e-mail pub@shibunkaku.co.jp

http://www.shibunkaku.co.jp

表紙デザイン 鷺草デザイン事務所

日本の食の近未来

熊倉功夫編

【3月刊行】

飽食の時代と言われる現代日本において、「食の豊かさ」は今後何をもちたらすのか？ 謳歌するだけでよいのか？ 本書は、このような日本の現代に疑問を感じた八名の研究者が、食文化の近未来について共同研究会を行った成果。

【内容】（所属は二〇一三年三月現在）

日本の伝統的食文化としての和食の行方

熊倉功夫（静岡文化芸術大学学長）

日本における家族の変化と食生活

林在圭（静岡文化芸術大学文化政策学部教授）

食空間と将来

深田てるみ（静岡文化芸術大学デザイン学部准教授）

「食のとらえ方」のパラダイムシフトを求めて

アーユルヴェエダを照射版として

清ルミ（常葉学園大学外国語学部教授）

高齢者と食の満足

——韓国の高齢者福祉施設を例に——

守屋亜記子（女子栄養大学准教授）

鼻で食べることで目で食べることに

シンシア・ネリ・ザヤス（フィリピン国立大学国際研究センター教授）

草野美保

——受容と発展をめぐる——

（財）味の素食文化センター）

食生活の変遷からみた

日本の食の来し方行く末

米屋武文

（静岡文化芸術大学文化政策学部教授）



▼四六判・二六〇頁／定価二、四一五円

老舗に学ぶ

【4月刊行】

西岡正子編

京の衣食住

佛教大学四条センター叢書5

◎古くからの技と伝統を守り継ぐ老舗。その主人や、おかみ自らの言葉で綴る「本物の京都学」

◎佛教大学四条センター公開講座《老舗に学ぶ京の衣食住》講座録。

◎京都に百年以上続く老舗の、商品に秘められた技や歴史はもとより、生活のなかに息づく智慧や文化、経営哲学、理念を紹介。

【内容】

京の老舗 謙虚な自信（京都市長・門川大作）
伝統と老舗（茶道裏千家大宗匠・千玄室）

一章 二軒茶屋 中村楼

十二章 上七軒大文字

二章 松栄堂

十三章 京つけもの西利

三章 祇園辻利

十四章 泰生織物

四章 祇をん 幾岡屋

十五章 亀末廣

五章 嵐山 熊彦

十六章 いもぼう平野屋本家

六章 龍善堂

七章 半兵衛麩

八章 松文商店

九章 村山造酢

十章 彩雲堂

十一章 本家 尾張屋本店



▼A5判・二四二頁／定価一、九九五円

朝鮮独立運動と

東アジア

1910
—
1925

小野容照著

朝鮮独立運動はいかなる国際的要因によって展開していたのか、同時代の日本、中国、台湾の社会運動や民族運動との間にはどのような相互作用があったのか。

一九一九年の三・一運動以前の在日朝鮮人留学生の組織活動、出版活動、独立運動の展開過程を追い、彼らが三・一運動後に社会主義勢力を形成していった過程を、その国際的要因と東アジア各国の運動との関連性に着目して論じる。



第一章 在日朝鮮人留学生の民族運動の胎動―「韓国併合」直後
第二章 在日朝鮮人留学生の出版活動
―朝鮮人留学生、朝鮮民族運動と日本人実業家

第三章 在日朝鮮人留学生の独立運動
―中国人・台湾人留学生と朝鮮人留学生

第四章 三・一運動後の朝鮮における社会と思想の変動

第五章 東アジア共産主義運動と朝鮮
―上海派高麗共産党国内支部の誕生

第六章 日本における朝鮮人社会主義運動の発生と展開
―北風派共産主義グループの形成過程

おの・やすてる：一九八二年横浜市生。学習院大学経済学部卒。高麗大学大学院韓国史学科修士課程修了。京都大学大学院文学研究科博士後期課程修了。現在、京都大学人文科学研究所助教。

【4月刊行】

▼A5判・四二四頁／定価七、八七五円

植民地朝鮮の

日常を問う

韓哲昊
原田敬一
金信在
太田修 著

第2回佛敎大学・東國大学校共同研究

佛敎大学国際学術研究叢書③

佛敎大学と韓国・東國大学校との3年間
にわたる学術交流の成果。植民地下における日常生活の様々な事象、日韓の歴史認識のズレを検討するための4編。

日帝の韓国併呑に対する韓国民の認識と対応

韓哲昊（東國大学校教授）

韓国併合前後の都市形成と民衆―港町群山の貿易・生産・生活

原田敬一（佛敎大学教授）

日帝強占期における「古都・慶州」の形成と古跡観光

金信在（東國大学校教授）

戦時期大邱の朝鮮人女子学生の学校生活―1937年の日記から

太田修（同志社大学教授）

▼A5判・三〇六頁／定価二、九四〇円

朝鮮近代史を歩く

太田修著

京都からソウルへ

佛敎大学鷹陵文化叢書②⑩

朝鮮半島とそれにつながる人々にとって植民地支配と戦争の歴史はどのようなものであり、どのように記憶されているのか……。歴史と縁のある場所を訪れ、風景に触れ、人に出会ったなかから生まれた一書。

▼四六判・二七〇頁／定価一、九九五円

一九三〇年代

【5月刊行予定】

東アジアの文化交流

上垣外憲一編

大手前大学比較文化研究叢書⑨

世界恐慌のため鎖国経済化が進み、東アジアでは満洲事変を皮切りに世界大戦へと発展する時代。戦争の影で見落とされがちな当時の文化交流を様々な視点から論じる。

社会史論争と一九三〇年代の中日史学思潮

誤訳・重訳と文芸政策としての理論生産

侮蔑、趣味、そして憧憬から脅威へ

研究ノート 下位春吉とイタリア・ファシズム

一九三四年周作人の日本再訪とその周辺

ピラミッド高しといえども……

一九三〇年代日本語雑誌における在朝日本人女性の表象

金素雲と佐藤春夫 一九四〇年

渡辺晨畝と「日滿聯合美術展覧会」

戦時下の思考と眼差し

『無国籍者』のこだわり

▼A5判・二五〇頁・定価二、八〇〇円

一九二〇年代

東アジアの文化交流 I・II

川本皓嗣・上垣外憲一編 大手前大学比較文化研究叢書⑥⑦

未開拓な部分が多い一九二〇年代の東アジアの文化交流を総観する

I A5判・二三二頁／定価二、九四〇円

II A5判・二七四頁／定価二、六二五円

比較詩学と文化の翻訳

川本皓嗣・上垣外憲一編 大手前大学比較文化研究叢書⑧

詩歌、民謡など比較文化と翻訳にまつわる事象を様々な視点から論じる

▼A5判・二八六頁／定価二、六二五円

阪神文化論

川本皓嗣・松村昌家編 大手前大学比較文化研究叢書⑤

歌人や作家に愛された風土など、文学、歴史から阪神文化に触れる

▼A5判・二九〇頁／定価三、三六〇円

夏目漱石における東と西

松村昌家編 大手前大学比較文化研究叢書④

作品に織り込まれた西洋的概念と東洋的概念の葛藤などをあつかう

▼A5判・二〇八頁／定価二、九四〇円

ヴィクトリア朝英国と東アジア

川本皓嗣・松村昌家編 大手前大学比較文化研究叢書③

近代化過程における日本・中国・朝鮮と英国との文化交流誌

▼A5判・二八〇頁／定価三、三六〇円

視覚芸術の比較文化

武田恒夫・辻成史・松村昌家編 大手前大学比較文化研究叢書②

古今東西の文学テキストと絵画・工芸などとの関わりを論じる

▼A5判・二五六頁／定価二、九四〇円

谷崎潤一郎と世紀末

松村昌家編 大手前大学比較文化研究叢書①

海外における評価も踏まえ、比較文学的見地から谷崎の文学に迫る

▼A5判・二二二頁／定価二、九四〇円

憲政常道と 政党政治

近代日本
二大政党制の
構想と挫折

小山俊樹著

近代日本の政治史上において、「憲政の常道」とはいかなる意味をもったのか――

本書では、戦前二大政党論の形成と展開、そして崩壊について描き出し、日本の二大政党政治が抱える諸課題を提示する。戦前日本において、二大政党制の導入に込められた理念とは何か。二大政党制をめざす政治家やメディアの戦略とは。そして政党政治の崩壊と二大政党制の関係は、どのようなものであったか。これらの視角から、「憲政の常道」と日本の政党政治をとらえなおす。

序 論 近代日本における「憲政の常道」の意味

第Ⅰ部 大正政変期における二大政党論の構築

第一章 日露戦後における二大政党論の形成

第二章 対外硬派の二大政党論

第三章 吉野作造の二大政党論

第Ⅱ部 憲政常道論の形成と展開

第四章 「憲政常道」と「政界縦断」

第Ⅲ部 憲政常道と二大政党政治の崩壊

第六章 「協力内閣」構想と元老西園寺公望

第七章 憲政常道の崩壊と元老西園寺公望

結 論 近代日本における二大政党政治の構想と挫折

こやまとしき：一九七六年広島県生。京都大学文学部（日本史学専攻）卒業。京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程修了。京都大学博士（人間・環境学）。現在、帝京大学文学部史学科専任講師。



待望の完結!!

増補 改訂 西村茂樹全集

日本弘道会編／古川哲史監修

〔全12巻・完結〕

西村茂樹の思想は、『日本道德論』に述べるように儒教と哲学の精粹を探って日本の国民道德の基礎としつつも、蘭学・英学にも通じ真理を世界に求めて一局に偏することゝ戒め、日本道德の確立と道德を学問として体系化することにあつた。

本全集では、西村の学問的な業績を中心に構成し、これまで未発表の論説や『日本道德論』の初版本など思想的にも貴重な著書が初めて公刊される。道德学、哲学、論理学、社会学など、西村思想の真髓に迫る。

第1巻 著作1 A5判・七七六頁／定価一七、八五〇円

第2巻 著作2 A5判・七八四頁／定価一七、八五〇円

第3巻 著作3 A5判・八三六頁／定価一九、四二五円

第4巻 著作4 A5判・七六二頁／定価一七、八五〇円

第5巻 著作5・訳述書1 A5判・七九八頁／定価一八、九〇〇円

第6巻 訳述書2 A5判・七九四頁／定価一八、九〇〇円

第7巻 訳述書3 A5判・九〇八頁／定価一九、九五〇円

第8巻 訳述書4 A5判・八一八頁／定価一八、九〇〇円

第9巻 訳述書5・日記 A5判・八〇二頁／定価一八、九〇〇円

第10巻 論説1 A5判・七四〇頁／定価一七、三二五円

第11巻 論説2・訳述書6他 A5判・七九〇頁／定価一八、九〇〇円

第12巻 論説3・書簡・詩歌・年譜

▼A5判・七四〇頁／定価一七、八五〇円

全12巻 揃定価二二二、六〇〇円

〔5月完結予定〕

岩倉具視関係史料

佐々木克・藤井讓治
三澤純・谷川穰 編

〔全2巻〕

平成25年
重要文化財に指定

『岩倉公実記』の編纂にあたり利用された史料の最も主要な部分で、原文書を多く含み、未刊行書簡や書類も多い。維新史の定説に変更を迫る新出史料を活字化。

◎憲政資料室所蔵文書・対岳文庫所蔵文書・内閣文庫所蔵文書に次ぐ、第四の岩倉具視関係文書群

◎『岩倉公実記』編纂時に利用されたものの最も主要な部分で、その後大阪の質商に売却されたものと思われ、現在は海の見える杜美術館（広島県廿日市市）所蔵

◎一七二〇点の文書が二七三巻に成巻されている（ごく一部は未成巻）

◎東京寛都のいささつを示す史料や、閣議の議案や決議の過程がわかる史料など、これまでに他の史料集などで紹介されていない未刊行書簡や書類が多数

【1月刊行】

▼A5判・総一一〇八頁／定価 二五、二〇〇円



高木仙右衛門に

関する研究

「覚書」の分析を中心にして

高木慶子著



江戸時代末期～明治初期に起きたキリスト教信徒弾圧事件「浦上四番崩れ」。中心人物である高木仙右衛門の「覚書」を分析、宗教学・歴史学の視点から、信教の自由獲得に果たした役割を論証。仙右衛門の曾孫による、キリスト教史研究。

〔4月刊行〕

▼A5判・二三八頁／定価二、一〇〇円

長崎県教育史

都道府県教育史シリーズ

外山幹生著

長崎の寺子屋・郷学校・私塾・藩校などの教育施設のほか、広く社会・宗教・産業教育などにもふれ、古代から明治前期までの教育の事跡を紹介。

▼四六判・三一八頁／定価一、八九〇円

岩倉使節団における宗教問題

山崎渾子著

キリスト教禁制のまま諸国歴訪にむかった岩倉使節団は、その後の明治政府の宗教政策にどのような影響を与えたか。使節団関係史料を読み込み検証。

▼A5判・二五〇頁／定価三、九九〇円

日欧のかけはし

南蛮学の窓から

松田毅一著

南蛮史料の研究で知られる著者の小論・エッセイを収録。キリシタン時代の国際的環境、異文化との出会い、人々の姿を語る。

▼四六判・三五二頁／定価二、九四〇円

幕藩制国家の成立と対外関係

加藤榮一著

思文閣史学叢書

幕藩権力がどのような国際的環境のもとに国家支配の枠組を形成したか、「公儀」・幕藩権力と連合オランダ東インド会社との関係史を基軸に捉えなおす。

▼A5判・四八四頁／定価九、二四〇円

大阪川口居留地の研究

堀田暁生・西口忠編

安政六年から四〇年間存続した居留地の歴史。政治・経済・文化における影響を、一〇年におよぶ研究会の成果をもとに究明した基礎的な一書。

▼A5判・四三〇頁／定価八、一九〇円

明治期における不敬事件の研究

小股憲明著

体系的な研究がされてこなかった不敬事件を、明治期について網羅。豊富な実例を整理・検討することによって明治国家の特質を考察する。

▼B5判・五七六頁／定価一三、六五〇円

宣教と受容

明治期キリスト教の基礎的研究

中村博武著

日本におけるキリスト教の宣教と受容を新資料の検証を通して解明した力作。西洋文明が東アジアに与えた衝撃の一端を明かす。

▼A5判・六一〇頁／定価二二、六〇〇円

復活！ 不昧公大圓祭

小林一三が愛した
大名茶人・松平不昧

逸翁美術館編

逸翁が最も敬愛した大名茶人、松平不昧を採り上げた特別展図録。昭和29年、阪急百貨店古美術街での「不昧公大圓祭」では、松江からの出品物、不昧公好みのものなど多数が展示された。当時の出品作品を中心にカラーで収録。



〔4月刊行〕

▼A4判・八四頁／定価一、〇五〇円

―茶会記をひもとく― 逸翁と茶会

逸翁美術館編

逸翁美術館での特別展覧会図録。小林一三と茶の湯の出会いや、近代数寄者としての歩みを、残された茶会記をひもとくとき、オールカラーで紹介していく。

▼A4判・九二頁／定価一、〇五〇円

茶の湯文化と小林一三

逸翁美術館編

逸翁美術館の特別展覧会図録。小林一三の世界を「茶道との出会い」「逸翁の茶懐石」「逸翁と茶友」「逸翁の茶道観」「逸翁の愛した茶道具」にそって紹介。

▼A4判・一四八頁／定価二、〇〇〇円

近代数寄者のネットワーク

齋藤康彦著

茶の湯を愛した実業家たち
従来顧みられなかった茶会記録である「茶会記」のデータ分析を通して政界・官界・実業界を横断するネットワークを描出する。

▼A5判・三〇八頁／定価四、二〇〇円

近代日本における書への眼差し

高橋利郎著

日本書道史形成の軌跡
毛筆の文字資料が、近代に「書」として位置付けられていく過程を、書道史に関する出版、宝物調査や展覧会の列品、また文化財関連の法令から探る。

▼A5判・三〇四頁／定価五、〇四〇円

動物・植物写真と日本近代絵画

中川馨著

戦前日本における動物・植物写真や、それら写真集の歴史にスポットをあてて概説、また「動物・植物写真集」が、美術資料として担った役割を解明。

▼A5判・二五六頁／定価五、二五〇円

京都 伝統工芸の近代

並木誠士・清水愛子・青木美保子・山田由希代編

「海外との交流」「伝統と革新」「工芸と絵画」「伝統工芸の場の視点から、様々なトピックスや人物にまつわるエピソードを取り上げ概観する。

▼A5判・三〇〇頁／定価二、六二五円

応用美術思想導入の歴史

天貝義教著

ウィーン博参同より意匠条例制定まで
ウィーン万博への日本初参加から、意匠条例の制定まで、応用美術思想がいかに学習され、明治期美術・工芸界において指導的役割を果たしたかを解明。

▼A5判・四一〇頁／定価七、八七五円

芸術選奨文部科学大臣新人賞 受賞

(評論等部門)

文化庁主催。芸術各分野において、優れた業績を挙げた者又はその業績によってそれぞれの部門に新生面を開いた者を選奨する賞。

岡倉天心の

比較文化史的研究
ボストンでの活動と芸術思想
清水恵美子著

ボストンでの活動に焦点をあてる。著者がアメリカで行った文献資料調査による新出資料なども駆使し、複眼的な視座からアプローチ。

▼A5判・五四八頁／定価二一、二三五円



茶道文化學術奨励賞 受賞

大日本茶道学会主催。茶道文化研究に大きな貢献をしたと認められる著作・論文に対して与えられる賞。

茶の湯と音楽

岡本文音著

室町時代後期から江戸時代初期の文献をひもときつつ、形としては残され得ない「音楽」という視角から、茶の湯の美意識を解明。

▼A5判・三七六頁／定価八、一九〇円



ちや どう ほう げつ しゅう
茶道望月集

白奇顕成編 (3月刊行)

顕岑院本 (二)

藤村庸軒(一六一三〜九九)の孫弟子、久保又夢による享保八年(一七二三)成立の茶書。師の横井等甫から伝授された「庸軒流茶法」四十巻、「七ヶ条極秘切紙」三巻の内容を盛り込み、庸軒流茶法を詳述したもの。本書では、顕岑院本を翻刻する。

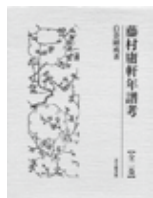
▼A5判・八五二頁／定価一六、八〇〇円

藤村庸軒年譜考

(全二冊)

庸軒の生涯の動向を、文献学的方法にもとづき歳ごとに明かした年譜考。茶道を軸とした近世文化史の魅力余すところなく伝える一書。上巻 天正三年〜天和二年／下巻 天和三年〜元禄二年。人名／文献・史料索引付き。

▼A5判・一八四八頁／定価三六、七五〇円



藤村庸軒流茶書

顕岑院本 (二)

京都の紫雲くろ谷金戒光明寺の塔頭である顕岑院には多くの庸軒流茶書が伝えられている。そのうち三男正員が庸軒の茶話を筆記したと思われる『藤村庸軒茶談』や観山によって定められた庸軒流茶道の基本となる稽古次第を中心に収録。

▼A5判・五二八頁／定価一一、〇二五円



しらさきけんじょう…一九四一年京都・顕岑院に生まれる。京都大学大学院文学研究科修士課程(宗教学仏教学専攻)修了。密教図像学会常任委員。京都花蓮研究会会長。神戸女子大学名誉教授。

早池峰岳神楽の 継承と伝播

中嶋奈津子著

佛教大学研究叢書18

【2月刊行】

早池峰神楽とは、岩手県北上高地の主峰早池峰山麓の二つの集落に伝承される岳神楽と大償神楽の総称である。いずれも成立より五〇〇年以上伝承されていることがわかっており、二〇一〇年にユネスコ無形文化遺産に登録されている。本書は岳神楽と、その流れを汲む神楽に着目し、その師弟構造と機能、さらに岳神楽の継承と伝播がどのような形でなされてきたのかについて、時代背景を踏まえながら解き明かす。

内 容

- 序 章 本書の研究目的と構成
- 第一章 早池峰神楽における研究史
- 第二章 早池峰山信仰と神楽
- 第三章 弟子神楽の条件
- 第四章 「神楽由来書」と「言い立て本」
—旧石鳥谷町を中心に—
- 第五章 弟子神楽の変遷
—旧東和町を中心に—
- 第六章 弟子神楽の成立過程
- 終 章 研究の成果と今後の課題



岳神楽 山の神舞

▼A5判・二三四頁／定価四、八三〇円
なかしまなつこ……一九六五年岩手県盛岡市生。二〇一二年佛教大学大学院文学研究科博士後期過程（通信教育課程）修了。博士（文学）。

京舞井上流の誕生

岡田万里子著

【3月刊行】

京都の花街祇園に伝承され、特色的な型や伝承作品が話題にされる京舞井上流、日本舞踊のなかでも一際異彩を放つこの流派は、どのように誕生したのか。本書は、近世から近代にいたる流派の歴史を検証し、伝承作品群の成立背景を考証する。堂上・花街文化、そして、能、人形浄瑠璃、歌舞伎といった他の芸能の影響を確認しつつ、その豊饒な母胎——近世後期京都における芸能的世界の解明に挑む。

内 容

- 第一部 井上流の歴史
- 序 章 先行研究とその問題点
- 第一章 初世井上八千代と創造の基盤
- 第二章 二世井上八千代と流派の形成
- 第三章 三世井上八千代と伝承の確立
- 第二部 井上流の舞踊
- 序 章 言説の誕生とその傾向
- 第一章 井上流と棋家の芸能
- 第二章 井上流と花街の芸能
- 第三章 井上流と能
- 第四章 井上流と人形浄瑠璃
- 第五章 井上流と歌舞伎



▼A5判・五五二頁／定価九、四五〇円
おかだまりこ……早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程（芸術学）修了。現在、ミシガン大学日本研究センター・トヨタ招聘教授、歴史学部講師。

原本『古画備考』の ネットワーク

古画備考研究会編

日本美術史の基本図書とされる『古画備考』。本書は、朝岡興禎自筆の原本『古画備考』を中心に、古画備考研究会が取り組んできた共同研究の成果。江戸時代後期に『古画備考』を〈書画情報〉総合集積の場として、繰り広げられていた古画研究ネットワークの実態、太田謙の「増訂 古画備考」(活字本)や大量に残る写本諸本から『古画備考』の受容の様相を検討。

総論『古画備考』に見る朝岡興禎の日本絵画観

I 各巻からの報告

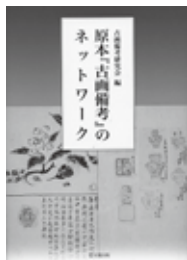
『本朝画史』と『古画備考』の関係／『古画備考』巻二〇上「雪舟」について／長谷川左近伝を読む／荒木千洲旧蔵「崎陽名画録稿」と『古画備考』／南画史の視点で見た『古画備考』／「コラム」番町朝岡邸の乙女椿／田能村竹田の「自娛」と「拙」／『古画備考』における谷文晁の書画情報／『古画備考』所載土佐家伝についての覚書／『古画備考』が伝える長隆写生図／「古画備考」巻三五「光悦流」の問題／「コラム」狩野晴川院が描いた弟三次郎の後姿／狩野宗秀「遺言状」をめぐる考察／英流の書画情報／池上本門寺所在の狩野家墓碑と『古画備考』

II 「古画備考」と近代

「コラム」『古画備考』の諸本／フェノロサの浮世絵観と『古画備考』／藤岡作太郎と『古画備考』／昭和の『古画備考』

執筆 玉蟲敏子／五十嵐公一／畑靖紀／野口剛／成澤勝嗣／星野鈴／黒田泰三

／鶴岡明美／相澤正彦／加藤弘子／松原茂／並木誠士／井田太郎／安藤昌就／村角紀子／江村知子



【3月刊行】

▼A5判・四九八頁／定価九、六六〇円

宗達伊勢物語図色紙

羽衣国際大学日本文化研究所

伊勢物語絵研究会編

17世紀前半の京都、俵屋宗達の工房で制作された「伊勢物語図色紙」は、独創的な技法、描法、大胆な発想と非現実的な表現を用いた優雅な王朝物語絵であり、いわゆる「琳派」が繰り返し描いた伊勢物語絵の〈始発〉である。

本書では、近年発見された色紙も含めて、59面のすべてをカラー、原寸大で掲載し、また、色紙に描かれた伊勢物語の世界の解釈、伊勢物語絵巻・絵本との比較対照、さらに、宗達における色紙の位置づけ、裏書の解説、色紙の特徴的な構図と技法、色紙成立の動機、色紙をめぐる人的ネットワークなどに関する新たな知見を収める。

序章 「宗達伊勢物語図色紙」の魅力

第一章 研究と鑑賞

第二章 論考

「宗達伊勢物語図色紙」の現状

「宗達伊勢物語図色紙」の人的ネットワーク

益田家本「宗達伊勢物語図色紙」の成立

「宗達伊勢物語図色紙」の加飾技法と構図

色紙書誌データ・所蔵者一覧

参考文献・資料あとがき

執筆 片桐洋一／泉紀子／青木賜鶴子／五十嵐公一／大口裕子／河田昌之／田中まさ／林進／山本登朗



【3月刊行】

▼B4判変型・二二〇頁／定価一九、九五〇円

近世妙心寺建築の研究

平井俊行著

京都府教育庁文化財保護課の修理技術者として、妙心寺建築物の保存修理に携わるなかで積みかさねてきた研究をまとめた一書。

臨済宗妙心寺派本山の個々の建築について、本山や塔頭に残る中世・近世の古文書や棟札の解読、実測のみならず、それぞれの建造物の行事での利用状況まで分析し、近世妙心寺建築成立の意義を検討する。

予定目次

- 第1章 序章
- 第2章 妙心寺の沿革
- 第3章 序論
- 第4章 天正・明暦の2期の法堂の建立の意味
- 第5章 再建においても形を変えられなかった仏殿
- 第6章 山門の建立の意味と活用
- 第7章 承応期の再建と新行事を創造する大方丈
- 第8章 時代により変化をする庫裏
- 第9章 伽藍建築最古の浴室
- 第10章 結語

ひらい・としゆき：一九五九年東京都立。京都工芸繊維大学大学院修士課程修了。博士（工学）。京都府教育庁指導部文化財保護課建造物担当課長。

【6月刊行予定】 ▼ B5判・四〇〇頁・定価九、九七五円

神仏習合の歴史と

嵯峨井建著

【3月刊行】

儀礼空間

神宮寺における神祇奉斎、寺院附属の鎮守社、仏教儀礼である神前読経、神職系図に基づいた神職周縁の仏法との関わり、神仏への天皇行幸、中近世をつうじた京都における神仏習合など、豊富な事例とともに神仏習合の諸形態を丹念にまとめた実証研究。

内 容

- 第一章 神仏習合と儀礼空間
- 神仏習合の基本形態／社寺行幸と天皇の儀礼空間／神宮寺の神祇奉斎／仏教空間における神祇
- 第二章 神前読経と經典
- 大般若經の伝播と神仏習合／中世における神前読経の場／一宮・惣社における仏事と大般若經
- 第三章 神職系図の研究
- 伊勢神宮の神主系図／『津守氏古系図』の研究／上賀茂神社系図の研究／若狭彦神社社務系図の研究／宇佐八幡宮の神主系図
- 第四章 洛中洛外の神仏習合
- 鴨社の神仏習合／祇園社の成立と観慶寺／天龍寺の鎮守社靈庇廟について
- 終章
- 史料編 神仏習合年表・大般若經年表

さがい・たつる：下鴨神社禰宜。 ▼ A5判・四二八頁／定価九〇三〇円

日本近世の宗教と社会

菅野洋介著

奥州関東を主に、仏教・神道・修験道・陰陽道等と地域社会との関わりを、東照宮や寛永寺などの幕府權威をも視野にいれて考察。本所權威の在地社会への浸透、在地社会における諸宗教の共存と対抗、民衆宗教の展開とそれを規定する社会情勢や、在地寺院など宗教施設の「場」としてのあり方を追求。

▼ A5判・三八〇頁／定価八、一九〇円

医療の社会史

〔3月刊行〕

生・老・病・死

京都橘大学女性歴史文化研究所編

〔内容〕

平安中後期における貴族と医師(増潤徹)
藤原実資と和氣相成・丹波忠明・藤原師通・忠実と丹波忠康・重康・施薬院使と医家丹波氏
鎌倉幕府の医師(細川涼一)
丹波時長の鎌倉下向と三幡の治療／「尼将軍」北条政子時代の医師／摂家将軍九条頼経の医師／摂家将軍九条頼嗣時代の医師／公家将軍宗尊親王の医師／「関東往還記」の丹波忠茂と丹波長世
『本草綱目』に見る中国医療の到達点(島居一康)
『本草綱目』の版本について／『本草綱目』の成立過程／「綱」と「目」／中国医学史における『本草綱目』の到達点
『コラム』敦煌石窟壁画からみた民衆の喪葬礼儀(王衛明)
室町・戦国期の山科家の医療と家業の形成(米澤洋子)
山科家と医療Ⅰ／山科家と医療Ⅱ／山科家と医療Ⅲ
曲直瀬玄朔とその患者たち(田端泰子)
曲直瀬玄朔と曲直瀬家／「玄朔道三配剤録」とは／診察の実態と患者たち
『コラム』モンゴル時代の文化交流(小野浩)
幕末京都における医家と医療(有坂道子)
病と治療／京医の種痘活動／小石筑理堂での学び
明治前期の村と衛生・病氣(高久嶺之介)
明治前期の京都府乙訓郡上植野村の概略／明治前期の乙訓郡に医者はいくらいたか／種痘の開始／伝染病への対応／置き薬の世界／六人部講の成立
『コラム』W.B. イェイツ・シユタイナツハ手術・長寿法(浅井雅志)
錯乱と祟りの間(野村幸一郎)
『知性』の近代／自我の彼岸／全体性への憧憬
母乳が政治性を帯びるとき(南直人)
乳児死亡率問題／都市における乳児保護のための諸施策／母乳哺育推進か、人工乳改良か
『コラム』日本の看護基礎教育における死の教育についての概観(奥野茂代)

▼A5判・三〇四頁／定価二、九四〇円

田邊尚雄賞 受賞

東洋音楽学会主催。東洋音楽に関する研究の奨励及び会員の研究業績を表彰することを目的とした賞。

天皇・将軍・地下楽人の室町音楽史

三島曉子著

天皇・将軍家の室の御師範、地下楽人豊原氏の南北朝期から約一五〇年の活動に着目。公・武・楽家という三者の関わりのなかから、権威に密接にかかわった音の文化を論じる。



▼A5判・三六〇頁／定価六、九三〇円

中世蹴鞠史の研究 鞠会を中心に

稲垣弘明著

室町期以降の蹴鞠会の挙行形態の歴史を体系的に論じた一書。新興武家層を参加者として加えた場であり遊興性を加味しながら変容し、「故実」に代わって「新儀」が定着すること、それが近世の家元制度の萌芽と認められることなどを明らかにした。

▼A5判・三〇〇頁／定価五、七七五円

阿蘇下野狩史料集

飯沼賢司編

阿蘇の西山麓に広がる原野、下野。そこで中世に行われた「下野狩神事」の史料である、永青文庫所蔵「下野狩日記」「下野狩旧記抜書」とその関連文書、阿蘇家所蔵下野狩関連史料を翻刻・解題・用語解説を付す。

▼A5判・三一四頁／定価七、八七五円

中世の契約社会と文書

村石正行著

【3月刊行】

従来、中世の契約慣習のなかで債権者から渡され債務者の側に残る文書についての研究は等閑視されてきた。本書は売買・貸借などの契約関係を題材に、それに関わる契約者双方の文書作成のあり方を検証、「塵芥集」における法慣習なども援用しながら、双方方向の文書授受とそれにまつわる文書作成が一般的におこなわれていた可能性を示す。

【内容】

序章 契約における文書作成 分析と課題

第一部 中世の契約と文書の作成

第一章 売買における双方方向の契約文書

第二章 中世の借用と預状の作成

第三章 処分状の作成

第二部 売寄進と同日付売券・寄進状の作成

第四章 売買契約と売寄進

第五章 長楽寺復興運動と売寄進

第六章 洞松寺文書にみる売寄進と在地社会

第三部 中世後期禅宗寺院における文書目録作成と契約文書

第七章 中世後期曹洞宗寺院の地方伝播

第八章 中世後期地方曹洞宗寺院にみる仏事興行と文書目録の作成

第九章 北高全祝と龍雲寺

終章 中世後期臨済宗寺院にみる土地集積と文書目録の作成

「臨照山記録西岸寺規式」の文書目録を中心に

▼A5判・三五二頁／定価七、八七五円

むらいし まさゆき：一九七一年生。長野県松本蟻ヶ崎高等学校教諭。

戦国大名佐々木六角氏の基礎研究

村井祐樹著

【1月刊行】

これまで実証的な研究が不十分であった戦国期の佐々木六角氏について、可能な限り一次史料を用い、六角氏や家臣の動向、実態など基礎的事実を明らかにする。附編として二三〇頁におよぶ関係記録史料集を付す。

【内容】

第一部 佐々木六角氏と家臣団

第一章 戦国時代佐々木六角氏の動向

高頼期／氏綱期 定頼期 義賢／義弼期

第二章 佐々木六角氏家臣団の実像

六角氏家臣団の分析 六角氏家臣団の分類

補論 戦国期佐々木六角氏家臣名の再比定

第三章 佐々木六角氏家臣団の結合形態

相論の前提 芦浦安国寺相論 家臣団連合の実像

第二部 佐々木六角氏と領国

第四章 佐々木六角氏領国の莊園三村庄とその代官

三村庄について 三村庄の代官

第五章 佐々木六角氏と近江国内外交通

六角氏権力と保内・枝村紙荷相論 六角氏と北伊勢

第六章 佐々木六角氏発給文書と領国

附編 戦国期「室町幕府—守護体制—」論の再検討 地域権力の確立

戦国時代佐々木六角氏関係記録史料集（稿）

▼A5判・五三〇頁／定価二二、一八〇円

むらいし ゆづき：一九七一年生。東京大学史料編纂所助教。

室町幕府 管領施行システムの研究

亀田俊和著

本書は、応仁・文明の大乱以前の室町幕府における根幹の制度であり、將軍の主從制的支配権を強化・促進し、全国の武士・寺社本所に権益を与えることによって政権基盤の強化に大きな貢献を果たしたと評価できる管領施行システムの沿革と意義を分析・解明する。

内 容

序章 室町幕府訴訟制度史研究の現状と課題
第一部 鎌倉幕府・建武政権の施行システム

鎌倉幕府下文・下知状施行状の基礎的研究／鎮西探題下知状執行命令の形成と展開／建武政権訴訟決断所施行牒の研究／陸奥將軍府恩賞充行制度の研究

第二部 室町幕府管領施行システムの形成

室町幕府執事施行状の形成／觀應の擾乱以降の下文施行状の展開／南北朝期室町幕府仁政方の研究

第三部 室町幕府地方統治機關の施行システム

鎌倉府施行状の形成と展開／南北朝前期九州地方の恩賞充行／南北朝期奥州探題の恩賞充行制度の研究

第四部 室町幕府管領施行システムの展開

室町幕府安堵施行状の形成と展開／寄進状施行状の施行文言の分化に関する一考察／室町幕府管領施行状の展開

終章 本書の研究成果の概要

かめだとしたか：一九七三年秋田県生。京都大学博士(文学)。現在、京都大学文学部非常勤講師、兵庫大学兼任教育職員。

【3月刊行】

▼A5判・五四四頁／定価一〇、二九〇円

日本中世の社会と寺社

細川涼一著

【3月刊行】

◎律宗・律僧が中世社会で果たした役割を中心に、女性や被差別民など、歴史の主流からこぼれ落ちがちなものたちへ常にまなざしを注ぎ、境界領域から歴史を問い続けてきた著者の主要な研究成果を一書にまとめる。

序 論

第一章 黒田俊雄『日本中世の国家と宗教』
第二章 網野善彦『中世東寺と東寺領莊園』
第三部 中世律宗と公武政権

第四章 中世における戦争と平和

第五章 叡尊の鎌倉下向と鎌倉幕府の女性
第六章 三条大宮長福寺尊鏡と唐招提寺慶円

第七部 中世社会と律僧

第七章 忍性の生涯

第八章 覚如と定舜

第九章 西琳寺惣持と尼

第十章 唐招提寺釈迦如来像像内納入文書と女性・虫・非人

第十一章 幕末の女性とベットとしての狎

第十二部 中世の北野社と石清水八幡宮

第十三章 中世の北野社と宮仕沙汰承仕家

第十四章 「北野天神縁起」と鎌倉時代の北野社

第十五章 西京散所と北野社

第十六章 石清水八幡宮の柳禅尼如鏡と叡尊

第十七章 源義経の妻と母

第十八章 河越重頼の娘

第十九章 常盤

第二十章 白拍子の実相

ほそかわりょういち：京都橘大学文学部歴史学科教授。

▼A5判・四五二頁／定価八、〇八五円

高野山正智院 連歌資料集成

正智院監修

〔全2冊〕

高野山正智院は平安時代創建の学侶方宝門の筆頭寺院であり、江戸時代には有力大名の信頼も厚く、貴重な仏像、仏画、典籍などを多数所蔵している名刹である。本書は、すでに発刊している経蔵史料集成一（正智院文書）および同集成二・三（正智院聖教目録上・下）（いずれも吉川弘文館刊）に続いて、当院に伝わる未発表の連歌資料の優品を影印本として刊行するものである。

内 容

上巻 刊行にあたって／九州問答（付連歌十様）／一紙品定／連歌禁好之詞／連歌初心抄／連歌用抄／政長・宗伊・宗祇三ッ物／解題
下巻 伊勢千句／四道九品／連歌至宝抄／連歌新式心前記／解題／正智院蔵連歌資料目録

▼A5判・総八四〇頁／定価二一、〇〇〇円

〔5月刊行予定〕

能勢朝次著作集

〔全10巻〕

能勢朝次著作集編集委員会

近世俳諧、和歌、連歌に及び、遂に中世能楽の源流を究め能楽論の系譜を解析、名著『能楽源流考』を著した博士の全貌を窺う、能勢学の集大成。

▼A5判・平均四五〇頁／揃定価六〇、七九五円

中世歌書集

龍谷大学善本叢書31

大取一馬責任編集

龍谷大学図書館所蔵、写字台文庫旧蔵の歌書のうち、天下の孤本や、最古の写本、内容上意義深いものなど貴重書と認められる5点の典籍を選び影印公刊し、解説を付す。

内 容

愚見抄 光闡百首
詞字注 自讃歌注
九代抄
解説（酒井茂幸／吉田唯／小田剛／安井重雄／近藤美奈子）

〔6月刊行予定〕

▼A5判・六六四頁／定価一三、九六五円

四十人集

〔全3冊〕 龍谷大学善本叢書18

家郷隆文責任編集

平安鎌倉期にかけての歌人41人の私家集を書写した40冊の叢書を影印公刊し、解説を併載。澄月や小澤蘆庵の門人らが書写した興味深い史料。

▼A5判・総二一〇〇頁／定価五〇、四〇〇円

詞源要略・和歌会席

大取一馬責任編集 龍谷大学善本叢書24

室町後期の清原宣賢自筆の『詞源要略』（孤本）は和歌の分類体辞書、『和歌会席』は和歌作法書であり、歌学史・辞書史研究に有益な史料を影印公刊。

▼B5判・二八〇頁／定価一九、九五〇円

摂関院政期

〔2月刊行〕

森新之介著

思想史研究

摂関院政期における民衆仏教史観の研究史を整理し、当該期の思想家たちや事象の考察および実証研究を深めることにより、通説としての民衆仏教史観と切り結び、その実像を鋭く描き出す。

日本の思想史上、極めて重要な時期の一つとされる摂関院政期の思想史叙述に修正を迫る一書。

第一章 民衆仏教史観の研究史

平民主義と仏教史叙述／村上專精の仏教史叙述／民衆仏教史観の闊歩と雄伏／古代対中世の闘争／正統対異端の闘争

第二章 末代観と末法思想

議論の前提／諸史料における末代観と末法思想／末代観の性格／藤原行成／後朱雀帝と小野宮実資、藤原資房／大江匡房／中御門宗忠／歴史思想の要因

第三章 九条兼実の反淳素思想

思想形成の過程／徳政と祈禱／徳政と内心／文治の意見封事

第四章 法然房源空の思想

不孝意識と凡夫意識／自行志向と民衆仏教者なる虚像／晩年の時機論と二門二行判／決定往生と三心四修

第五章 随分持戒と造悪無慚

法然房源空の随分持戒／一念義の造悪無慚／叡山衆徒の鬱陶

第六章 興福寺の訴訟と専修念仏者への朝誡

「興福寺奏状」／朝廷と五師三綱の交渉／興福寺による訴訟の位置付け／建永二年の朝誡／弟子たちの背師自立

もり・しんのすけ：一九八三年神奈川県生。早稲田大学第一文学部卒業、東北大学大学院文学研究科日本思想史専攻分野博士課程後期修了。博士(文学)。現在、日本学術振興会特別研究員。

▼A5判・三五二頁／定価六、八二五円

御堂関白記全註釈

全16冊

待望の
完結

山中裕編

道長の日記「御堂関白記」の原文・読み下しと詳細な註により構成するシリーズ。本全註釈は永年にわたる講読会と集中講座による成果である。

国書刊行会・高科書店発行分である初版については復刊し、「寛弘6年」については、初版刊行時の特殊事情を考慮して、編者のもとで註釈部分の再検討を行い、大幅な改訂を加えて改訂版として刊行する。

御堂御記抄／長徳4年／長保2年

寛弘元年〔復刻〕

寛弘2年〔復刻〕

寛弘3年

寛弘4年

寛弘5年

寛弘6年〔改訂版〕

寛弘7年

寛弘8年

長和元年〔復刻〕

長和2年〔復刻〕

長和4年

長和5年

寛仁元年〔復刻〕

寛仁2年上〔復刻〕

寛仁2年下／治安元年〔復刻〕

二〇四頁／定価五、二五〇円

二八八頁／定価八、五〇五円

二〇二頁／定価五、九八五円

二一八頁／定価五、七七五円

二二〇頁／定価五、七七五円

二二〇頁／定価五、二五〇円

一七〇頁／定価五、〇四〇円

二二〇頁／定価五、七七五円

二五六頁／定価六、八二五円

三〇〇頁／定価一八、六五〇円

三九八頁／定価一八、六五〇円

二九〇頁／定価一六、三〇〇円

四四二頁／定価一一、〇七五円

二六八頁／定価七、八七五円

一九二頁／定価五、六七〇円

一九八頁／定価五、七七五円

——思文閣グループの逸品紹介——

美の縁

び

よすが



表面の網掛と二匹の魚が印象的な北大路魯山人の信楽時代形花入。信楽は絵付けの少ない焼物ですが、本作は図柄を線描きするという魯山人ならではの自由な作風が楽しめる一点です。

明治一六年（一八八三）京都の上賀茂に生まれ、篆刻家・画家・陶芸家・書道家・漆芸家・料理家・美食家などの様々な顔を持っていた魯山人。その芸術活動のなかでも陶芸は特に人気があり評価が高く、その作品は現在も多くのコレクターを魅了し続けています。

食を楽しむ、また自らその料理にふさわしい器を制

◆信楽時代形花入◆ 北大路魯山人

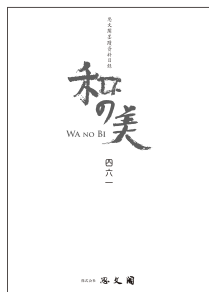
作し続けた魯山人は、「器は料理の着物」という有名な言葉を遺しました。魯山人の作品からはどこことなく物足りない印象を受けますが、そこには、「器は料理を盛り付けてこそ完成するもの、使うためのもの」という魯山人の美意識が貫かれているのです。

信楽特有の土味を最大限に生かした素朴であたたかい情感の本作ですが、内部をのぞくと驚きの趣向が凝らされています。上部から放射線状に緑釉が流し掛けられており、細部まで魯山人のこだわりを感じとることが出来ます。

（思文閣本社営業総務・三村明依子）

思文閣墨蹟資料目録

和の美



古書画から
近代美術まで
毎月100点の名品を
通信販売にて
お届けします。

お電話もしくはホームページにてお問い合わせください。

京都市東山区古門前通大和大路東入る元町 355
TEL(075)531-0001 FAX(075)531-5533
<http://www.shibunkaku.co.jp/>
info@shibunkaku.co.jp

思文閣古書資料目録

※古典籍を中心に古文書・古写経・絵巻物・
古地図・錦絵などから学術書全般に至るま
で、あらゆるジャンルの商品を取り扱って
おります（年4回程度発行）。

※ご希望の方は、下記、思文閣出版古書部ま
でお問い合わせ下さい。



晩
斎
百
鬼
画
談

全
一
帖

京都市東山区古門前通大和大路東入る元町 355
TEL(075)752-0005 FAX(075)525-7155
<http://www.shibunkaku.co.jp/kosho/>
kosho@shibunkaku.co.jp

美術品を売る、買う。

「思文閣大交換会」が
いちばんの方法です。

思文閣大交換会は、年4回の大入れ会。
美術品を売りたい方、買いたい方双方に
ご満足いただいております。

詳細・お問い合わせは

思文閣京都本社

TEL (075)531-0001

mail info@shibunkaku.co.jp

細川護光 陶展

平成25年5月18日(土) - 26日(日)

10:00 - 18:00 (会期中無休)

ぎやらりい思文閣では、今年も
細川護光の個展を開催いたします。
皆様のお越しを心よりお待ち申し上げます。

ぎやらりい思文閣

京都市東山区古門前通大和大路東入る元町 386
TEL(075)761-0001
<http://www.shibunkaku.co.jp/gallery/>
gallery@shibunkaku.co.jp